



これからの中学校に問われる「学力」を考える

学力とは何か。この問いは、教育に携わる者であれば誰もが一度は立ち止まり、考えざるを得ない根源的なテーマである。かつて学力は、知識や技能の量として測られてきた。しかし、変化の激しい現代社会において、それだけでは子どもたちが不確実な時代を生き抜く力にはならない。今求められているのは、变化を自らの学びで切り拓き、他人と協働して新たな価値を創り出す力である。言い換えれば、「学び続ける力」として捉え直す必要がある。

授業のあり方も変容している。かつては教師が教え、生徒が受け取る一方の構造だったが、今や生徒が自ら問いを立て、仲間と議論しながら学びを創造する姿が見られる。その可否を決するのがカリキュラム・マネジメントである。教師はもはや知識の伝達者ではなく、学びの共同設計者なのである。

学習指導要領で示される思考力・判断力・表現力は、いまや教育の中核概念となつた。しかし、その本質は単なるスキルの習得ではない。思考力とは、現代でも重い。思考力とは自らの頭で考え抜く意志、判断力とは多様な価値の中から最善を選び取る倫理的な力、表現力とは他者との関わりの力である。これらが有機的に結びついたとき、学力は「知の再生産」から「知の創造」へと転換する。A Iが膨大な情報を処理できる時代だからこそ、人間には自らの言葉で世界を語る力が求められている。

また、学力は知の領域にとどまらない。日本の教育が大切にしてきた「知・徳・体」の調和は、現代でも重要な理念である。知とは世界を理解する力、徳とは他人と共に生きる感性と倫理、体とは学んだことを実践に移す行動力である。

地域や社会の課題に向き合う探究活動において、生徒は知識を用い（知）、仲間と協働し（徳）、行動に移す（体）。この循環を通して、学力は生き方の力、すなわち実践知へと深化していく。

さらに、グローバル化の進展とともに、異なる文化や価値観をもつ他人と協働できる力が不可欠となつている。これを「共感する性」と呼んでいる。共感とは、相手の感情を理解することにとどまらず、他者の視点から世界を見直し、自分の思考を再構築する営みである。異文化交流や国際

協働探究の中で生徒が自分の「当たり前」を揺さぶられる経験こそ、多様な世界を自らの中に取り込む知性を育む契機となる。

学力を個人の成果としてではなく、共同の営みとして捉える視点も重要である。教師同士が授業を開き合い、学び合う文化、生徒が自らの学びを言葉にし、共有する文化を創造するところが、眞の学校力を高める。学ぶことの本質は、答えを知ることではなく、未知に出会い、自分の可能性を広げること。A Iが進化しても、人間にしか持てないのは「希望を抱く力」である。

学力とは、その希望を現実に変えるための知的基盤であり、世界と自己をつなぐ架け橋である。だからこそ、教師自身が問い合わせ、学び続ける存在でなければならぬ。学力とは、完成された能力ではなく、未来へ向かう意思そのもののなものである。



第77回

神戸山手グローバル中学校高等学校

校長

平井 正朗

Profile

平井 正朗 (HIRAI MASAAKI)

神戸山手グローバル中学校高等学校 校長
浜名山手学院 理事、関西国際大学 客員教授
兵庫県私学連合会 研修委員長・英語研究部会会長
大阪市教育委員会 英語教育ワーキング会議座長
国際教育学会 理事他

公職

全国英語教育研究団体連合会（全英連）理事
全国全国芸術高等学校校長会理事
大阪市教育委員会（教育長職務代理者）
京都府英語教育研究会連合会連絡協議会 会長
京都府私立中高連合会 外国語教育研究会委員長
京都府私立中高連合会 職員部代表
等を歴任

さらに、グローバル化の進展とともに、異なる文化や価値観をもつ他人と協働できる力が不可欠となつている。これを「共感する性」と呼んでいる。共感とは、相手の感情を理解することにとどまらず、他者の視点から世界を見直し、自分の思考を再構築する営みである。異文化交流や国際

視点から世界を見直し、自分の思考を再構築する営みである。異文化交流や国際